

書評

書評コーナーの新設にあたって

大学院教育の活性化と情報発信

愛知県立大学大学院国際文化研究科教授／多文化共生研究所副所長
亀井 伸孝

本誌では、創刊 10 年目にして、今号で初めて書評コーナーを開設することとなった。書評コーナーの担当編者として、この企画の趣旨とその背景を記しておきたい。

■書評の意義

書評という営みが、学術活動において重要であることは、論をまたない。新しい研究成果を精読、紹介することで、知識の共有が図られ、議論が活性化し、次なる研究を生み出すための素地が形成される。また、研究者個人にとっても、メリットが大きい。書評に取り組むことで、当該分野の知識に精通する機会を得ることができ、また、的確に要約や分析、論評を行うことで、表現力向上のよいトレーニングとなる。

■大学院教育における書評執筆トレーニング

これらの意義を念頭に置きつつ、本学大学院国際文化研究科では、院生教育の中に書評執筆のトレーニングを取り入れている。

院生が書評を書けるようになり、さらにそれを公開することには、以下のようなメリットがある。

- (1) 精読により、当該文献および関連分野の知識を得る
- (2) 当該分野の概要を把握し、自他の研究を位置づけることができる
- (3) 得た知識を要約し、適切に表現する力を養うことができる
- (4) 批評を行うことで、関連知識を活用しつつ、自身の立場性を明快にすることを促す

表 1 書評のモデル（大学院「国際文化論」授業資料に基づき筆者作成）

<p>■基本構造</p> <p>前半は「客観」、後半は「主観」</p>
<p>■具体的構成</p> <p>【紹介】【要約】【論点】【雑感】の四つのパートを意識して執筆する</p> <p>【紹介】本書および著者の紹介をする。</p> <p>【要約】本書のもくじに従って、各章や節ごとに内容をまとめていく。</p> <p>【論点】本書の意義（最も注目すべき特色、魅力、おもしろさ、主張、功績など）を挙げながら、それに対する自分の論評を行う。主観的な判断が含まれてもかまわないし、類似の書籍と比較してもよい。重要だと思われる箇所を、メッセージとして本書から引用するのもよい。価値判断が含まれてもよい。賞賛してもよいし、批判してもよい。ただし、根拠のない私見、感情をだらだらつづるのは望ましくない。ここでは知識に基づいて、論理的な主張をする。批判をするならば、根拠を示す。</p> <p>【雑感】論点の部分で述べなかった、本書に対する感想、印象、注文、今後の期待など。それ以外の些末なことを最後にまとめる。</p>
<p>■分量の配分</p> <p>前半と後半が、ほぼ半分ずつを占めることが望ましい。</p> <p>【紹介】：【要約】：【論点】：【雑感】＝１：４：４：１、または、１：４：３：２など。二つ目の客観的な【要約】部分と、三つ目の説得的に自分の意見を表明する【論点】部分が重要。</p>

- (5) 公衆の目に触れる形で書評を行うことで、責任を伴った言論活動を促す
- (6) 成果公開のトレーニングを行うことができる
- (7) 業績を積むことによるキャリア形成の効果もある

これらのメリットを念頭に、大学院国際文化研究科博士前期課程の共通基礎科目「国際文化論」のなかで、書評のスキルを身に付ける内容を盛り込んだ。

■書評の構造

書評は、本を読んで適当に概要や感想を書けばよいというものではない。筆者は、長年にわたって書評を読み、また自ら書いてきた経験に基づいて、「前半は客観的な紹介に徹すること／後半は主観も含めて自由に論じること」という二分法を原則とした書評の構造を定式化した。さらに、前半と後半を機能によってそれぞれ二つの部分に分割、表1に示したような四つの要素から成り立つ書評のモデルとして整理し、教育の中で用いてきた。

大学院科目「国際文化論」の講義では、このモデルに従って、前半で内容を明快に要約しつつ、後半で自分の学問上の関心に引き付けた論評を行うというトレーニングを実施した。なお、選書の方針は、以下の通りであった。

- (1) 本講義（大学院科目「国際文化論」）のテーマに関連する、以下のキーワードのいずれかに関わりの深い書籍を

選ぶ（人種、民族、国民国家、異文化理解、多文化共生、社会調査、フィールドワーク）

- (2) なるべく、新しい作品（過去5年以内程度）のものが望ましい
- (3) 他人に紹介したいと思える良書を選ぶようにする。また、既読の書籍よりは新たに取組む書籍の方が望ましい

■大学院教育の充実と情報発信

2018年度前期は、計12人の履修者がこの課題に取り組んだ。そのうちの優れた作品の執筆者5人に打診し、それらの作品に加筆を行った上で雑誌で公開する機会を提供した。

本研究所は、大学院附置の機関として、院生を含む若手研究者に研究スキルの習得と成果公開の機会を提供することを事業の柱のひとつとしている。院生の手による選書と書評執筆、その成果の公開は、本研究所からの情報発信の機会ともなる。院生と研究所の双方にメリットのある企画として、この書評コーナーが初めて実現した。

次年度以降、研究所の活動、本誌の編集方針、大学院教育の方針などは、その時々ニーズを反映させながら検討されていく。今回初めて試みた院生参加の書評コーナーが、若手研究者の活動活性化のモデルとなり、今後持続的に機能を果たしていくことが期待される。

質的調査の手引き 合言葉は他者理解

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美・2016.

『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』東京：有斐閣。

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
福田 薫

本書は3人の社会学者によって、社会学を学ぶ学生に向けて書かれた質的調査の教科書である。取り上げられているのは、フィールドワーク、参与観察、生活史という質的調査の基本的な方法であるが、各執筆者がこれまで社会学調査をおこなう中で培ってきたコツやノウハウのほか、多くの具体的事例が盛り込まれた「読んで楽しい」教科書となっている。執筆者は立命館大学教授の岸政彦、北海道大学准教授の石岡丈昇、立命館大学准教授の丸山里美の3名で、序章と第3章は岸、第1章は丸山、第2章は石岡が筆を執っている。また、古典から最近のものまで質的調査の代表的な文献や教科書をまとめたブックガイドが巻末に付いており、これは石岡と丸山が担当している。

序章では、社会学とは何か、という問いから始めて、社会学の方法論、量的調査・質的調査それぞれの特徴やその

相補的な関係性、社会学的調査の目的等を論じ、第1章以降の論へ進むための前提や背景を整理している。岸の定義によれば、質的調査とは「特定の状況下におかれた特定の人びとについての解釈」をするための方法である。ただし彼は「他者を軽々に理解しようとするのは暴力である」として、自覚と注意を喚起しつつ、同時にまた、自分たちの隣にいる「他者」を理解しようとする営みをあきらめてはいけない、そこから多くを学ぶことができる、とも指摘する。質的調査に立脚した社会学の目指すところは、「他者の合理性」を誰にもわかる形で記述し、解釈し、それを通じて、私たちが互いに隣人になることである、とも述べられている。なお、書名にも含まれている「他者の合理性」とは、一見しただけではわからない他者の行為や選択の背後にあるもっともな理由や動機を指しており、本書全体を貫くキー

ワードとなっている。

第1章は、質的調査の一つであるフィールドワークに焦点を当て、執筆者の丸山自身の経験に基づく具体例を織り交ぜながら、問いの立て方や文献・データ整理、論文執筆に至るまで、実際にフィールドワークをおこなう際の手順に即した内容で構成されている。問いを限定しすぎないことも重要、短時間で成果をあげようとしながことが実は近道、といった逆説的な指摘も執筆者の具体的な経験に裏打ちされて提示されており、説得力を持って響く。丸山は、調査とは基本的に迷惑なものであり、調査者は調査そのものが持つ権力性に配慮すべきであるとして、調査の倫理面や調査被害についてもかなりの分量を割いて言及している。さらに、調査者が被調査者にもたらす被害だけでなく、被調査者から調査者への被害という、これまで指摘されることがほとんどなかった問題も取り上げている。調査者の性別、年齢、性格、見た目、職業等の属性がフィールドワークには大きな影響を与えかねず、時には調査者へのセクシャル・ハラスメントといった問題に至ることがあるのである。この点に注意を促しつつ、丸山は、しかし属性とは個性でもある、と言う。質的調査では同じ対象、同じテーマで調査しても調査者の属性により違った人間関係が生じ、違ったものが見えてくる。それが質的調査の醍醐味でもあり、個人と個人が織りなす関係性を手掛かりに、他者を理解しようとする試みは、畢竟するに他者との関わりを通して自分とはなにかを知る作業でもあるのではないかと、との示唆がなされている。

第2章では、石岡によって参与観察が俎上に載せられ、マニラのボクシングジムでの経験を基に論が進められている。彼も丸山と同じく、自分の経験則から論じるスタイルを取る。それは「一般化された参与観察法を述べた教科書では、調査者の切迫感や高揚感が消去されて、無味乾燥になってしまい、参与観察の核心を捉え損ねかねない」ことを石岡自身が実感しているからである。まず石岡はフィールドで調査者が掴む「気分」の重要性を説く。ウェーバーの「思いつき」を引用し、「気分」も参与観察に伴う作業—フィールドノート作成や文献を読むこと等—を経る中で獲得されるものであり、調査者がフィールドに身を置く中で得られた「気分」は、論文をまとめる際の基礎となり、自信を生み出す素地を作る、と言う。参与観察は「人びと」でなく、「人びとの対峙する世界」を知るための営みである、と捉えることで、「他者の合理性」に近づくことが可能となる。また、そのような接近は、えてして時間・空間的に限定された状況の理解を通して開かれる。この点において、当事者らの世界の只中に身を置き、リアルタイムでその世界を体験して理解を深めていく、という参与観察の手法は独創性と意義を見せるのである。

第3章は岸が生活史調査について論じており、生活史調査とは「個人の語りに立脚した、総合的な社会調査」(p.156)とされる。生活史調査の目的や意義、生活史調査の先行研究を述べたうえで、岸自身のおこなった調査の経験談、それらに基づく具体的な生活史調査の方法や手順を説明する

形で本章は展開する。社会学における生活史調査をおこなった先達として取り上げられているのは、トマスとズナニエツキ、中野卓、桜井厚、谷富夫であるが、桜井と谷それぞれの「語りは物語(フィクション)である」「語りは事実である」という主張は対立するものでなく、その語りの生まれた背景を理解することにより、どちらの主張も正しく、いずれも対象の理解には必要であることが示される。なぜなら、現実とは「ひとつだけ存在するが、その語り方は無限にある」とでもいうようなものであるからだ、と岸は述べる。さらに「理解する」ということ自体が暴力かもしれないという可能性にも触れ、それでもなお我々は他者を理解し、隣人として連帯していくことが必要である、と主張している。そのうえで、岸はこのような語りの解釈や理論を越えたところに生活史の面白さがあること、波乱万丈な出来事の有無に関わらず、およそつまらない人生というものは存在しないこと、人生の語り、つまり生活史はそれ自体で面白く、興味深いこと、を指摘して結びとしている。

本書には執筆者自身の個人的な経験に基づく記述が多く、時にその具体性は生々しい。中でも印象に残ったのは第1章の丸山が学生時代に経験した例である。ホームレスの女性について調査していた丸山は、フィールドワークの現場で知り合ったタマコさんという女性から、しばらく居候させてほしい、と言われる。それは丸山の修士論文の大詰めの時期であった。タマコさんを居候させれば論文は完成させられない可能性が高く、論文とタマコさんの生活を秤にかけるような選択の中で懊悩した結果、最終的に「論文はただの紙切れにすぎない、人の命より大切な研究はない」と決意した丸山はタマコさんに泊まりに来よう伝える。結局はタマコさん側の事情が変わり、丸山の家に彼女が居候することはなかったとのことだが、これをきっかけにタマコさんとの関係はより深まり、丸山のその後の研究において中心となるようなアイデアが生まれた、という。同じ立場に置かれた場合、自分ならばどうしただろう、と思うと、丸山の選択の際どさにドキリとする。本書の副題に「他者の合理性の理解社会学」とある通り、質的調査の目的は他者の合理性の理解にある。しかし、それは必ずしも「適切な距離を保った客観的な調査」から得られるわけではない。丸山の例は、彼女自身がオーバー・ラポールの問題についても触れているように、「適切」な対応とはいえないかもしれないが、そこからはギリギリの判断によって選択した、過度で「不適切」な関わりによってこそ近づける他者の合理性の理解というものがあることが示唆される。その際に留意しておくべきは、第3章で岸がはっきりと明言しているように、量的か質的に関係なく、いかなる調査も最も基本的なところで暴力である、ということである。人は誰かに調査されるために生きているのではない。調査をおこなう者は調査の暴力性や権力性を常に問い直しながら、その場での自分のふるまいや選択を決めていくしかないのである。

また、質的調査とは解釈学的・現象学的なアプローチであるが故に、その客観性、科学性を疑問視する声は常につ

いて回ると思われる。しかし、本書でも、質的調査は非科学的であるとの批判に対し、科学や学問、あるいは知識といったものは一つの形式しかないわけではなく、その方法は多様である、と切り返している通り、科学的な数値や「客観性」に依拠するだけでは到達しえない理解の地平、知の在りようというものがあることも我々は感覚的に知っているのではないか。現在の学問の知の枠組みそのものに疑問を感じることがある者として、本書の執筆者らの姿勢は興味深く、心強く映った。

本書は社会学を学ぶ学生向けの入門書、教科書であるため、非常にわかりやすく書かれており、かつ実践的な内容を

含んでいる。執筆者自身の経験した具体例が多く挿入されていることも、わかりやすさや実践性に寄与しており、自らの経験を読者と共有しようとする彼らの率直さや衒いの無さには瞠目に値するものがある。こうした工夫や仕掛けによって、執筆者らが目論んだ通り、いわゆる教科書的ではない、読み物としても面白い一冊となっている点に加え、社会学の魅力の一端が門外漢にもわかるよう、平易な文章で著されていることは、本書の最大の特徴・メリットといってよい。経験者でなければ気づかないような技術面での詳細な注意等も記載されており、これから初めてフィールドワークをおこなう向きには大いに参考となるはずである。

“文化遺産開発”における考古学者と地域の関わり

関雄二, 2014.

『アンデスの文化遺産を活かす：考古学者と盗掘者の対話』京都：臨川書店。

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程

高田 祐磨

近年、特に 21 世紀に入ってから、考古学の世界で「パブリック・アーケオロジ」という言葉が用いられるようになってきている。それは、国によって定義がやや異なるものの、『入門パブリック・アーケオロジ』の著者である考古学者の松田陽によれば、「考古学と現代社会の関係を研究し、その成果に基づいて両者の関係を実践を通して改善する試み」というのがパブリック・アーケオロジの一般的な定義である。こういった試みが行われるようになってきた背景には、考古学の社会における有用性や位置づけ、つまりは「考古学がどのように社会に貢献できるか」が注目されてきているということが挙げられる。それは、考古学による発掘活動が特定の研究のみに益をもたらすのみのもではなく、調査地域の過去を明らかにすることでその地域に対して益をもたらすものであるという考え方に基づくものである。この観点から社会からの支持を得るためにパブリックすなわち市民を考古学に関与させようという意図もある。

本論文は、日本のアンデス考古学者であり、国立民族学博物館教授である関雄二の著作『アンデスの文化遺産を活かす：考古学者と盗掘者の対話』の書評である。本書の内容は、著者が 1991 年から出版年の 2014 年時点までアンデス地域で行ってきた調査活動の中で、アンデスの遺跡を巡って様々な対立や意見・認識の不一致などが存在するという実態を明らかにし、それに関して著者がどのようなフィールドワークを行い、またどのような形で調査地に貢献してきたかを扱ったものである。

前述したパブリック・アーケオロジという試みについて考える上で、本書は「考古学に市民に関与させる上で、

その地域での考古学の研究対象物と地域との関わりをどのようにして明らかにするか」という一つの課題に対する一例を提示する著作である。後に詳しく述べることにするが、筆者は自身がアンデス地域で行ったフィールドワークと、そこで得られた情報を基にして行った貢献を本書内で紹介しており、そこではフィールドワークで得られた情報をどのように地域への貢献に役立てるかということについて、また異文化理解についても扱われている。

本書は全 7 章で構成されており、それぞれの章が各 2、3 節で構成されている。また、各章の最後にはコラムとしてアンデスやペルーに関する簡潔な情報が書かれている。

序章「フィールドワーク前夜」では、本書のテーマである 1991 年から 2014 年までのアンデス考古学と地域住民の関わりについての調査活動を行う以前、著者がどのような活動をしていたか、そしてなぜ前述の調査活動を行うに至ったのかが扱われている。本章の冒頭で、著者は 1989 年のワカロマ遺跡保存計画というプロジェクトに参加していた際、作業員であった地域住民からかけられた「仕事をくれたことには感謝している。が、あなたたちさえ来なかったら、こんなひどいことにはならなかった」（本書 p.5）ということばに衝撃を受けたと語っている。このワカロマ遺跡保存計画では、ペルー文化庁の保存計画がワカロマの地元住民には一切知らされなかったがために文化庁と住民の間で対立が起こり、著者ら日本の研究者達はそこで板挟みにあった。そして、住民の声を無視する形で文化庁が推し進めたプロジェクトが進行する中で著者は前述したことばをかけられることとなり、「地元のためと思って取り組んだことが、

かえて彼ら／彼女らの生活を苦しめる結果を生み出してしまった」（本書 p.5）、「この問題を真剣に考えないと、フィールドワークをする意味がない、資格がない」（本書 p.6）と考えたと述べている。その考えから開始したのが、前述した 1991 年からの調査活動である。

第 1 章「遺跡はどうして壊れるのか」では、ペルー北部において遺跡の発掘が行われている状況について、その原因を明らかにするために調査を行い、そこで得られた情報について紹介している。第 1 節で筆者はフィールドワークを行う上での四つの問題設定を行い、第 2 節以降で遺跡の破壊についての調査から得られた情報を紹介しているが、ここでは、遺跡が壊れる原因について、天候の変動や森林の破壊に伴って破壊が進行しているという“自然による破壊”の面が紹介されている。

第 2 章「不法占拠と遺跡の破壊」でも、第 1 章同様に遺跡の破壊の原因について扱っているが、本章では特に、人々が遺跡の中に住居や耕地、工場などを作りそこで生活を営むことで遺跡の破壊が進んでいるという状況が明らかにされている。そこでは、かつて遺跡の土地を購入してそこに住み着いた住民や、ペルーの工業化に伴ってリマなどの都市部に流入してきたものの、住む土地がないので遺跡などの空いた土地を不法占拠してそこに住み着いた住民と、遺跡を管理する文化庁および政府との「生活か文化か」を巡る根強い対立の構図が示されている。

第 3 章「盗掘者の論理」では、第 1 章および第 2 章の事例同様に遺跡破壊の原因でもありながら、アンデスの伝統的文化を構成する一要素である盗掘について扱っている。ペルーやボリビアをはじめとしたアンデス地域では、遺跡に侵入し、そこにある土器や工芸品などの出土品を盗掘する人々の存在が長年問題となっている。当然ながら盗掘は考古学者にとって最も深刻な問題であるが、アンデス地域では半ば公然と盗掘が行われる現状があり、著者はその原因の解明のためにペルーの様々な地域で盗掘に関わりを持つ人々に聞き取りを行った。その結果、盗掘品はアンデスの人々が行う呪術的行為において不可欠なものであり、それを遺跡から持ち出す盗掘者「ワッケーロ」と呪術者は密接な繋がりがあることが明らかになった。さらに、著者の「遺跡はインカ＝貴族達の先祖のものであるはずなのに、それを盗掘することに抵抗はないのか？」という質問に対して、ほぼ全ての解答者が「インカは我々の先祖ではない。我々の先祖はスペイン人で、インカは異教徒だ」という回答をしたという点が重要なポイントとして取り上げられている。これはつまり、インカやアンデスの先スペイン期文明と現在のアンデスの人々の関係性に対して、我々“外部の人間”や考古学者、そして政府の認識と、本人達の認識が異なっているという事実が明らかになった事例である。そして著者はその背景についても調査を行い、それを第 3 節で述べている。

第 4 章「ミイラの帰属をめぐる攻防」では、ペルー・アレキパ州で発見された少女のミイラ「フワニータ」の帰属をめぐる争いと、そこから見える「文化遺産の帰属」と

いう問題について扱っている。本章では、日本でのフワニータを初めとした展覧会の企画を発端として、展覧会を企画した日本の団体に対するペルー内での批判キャンペーンやペルー政府への批判、そして企画から完全に排除され疎外された発見地である村のフワニータの帰属主張と政府への批判があったことが述べられている。この中で著者は、グローバル化の中で、地域社会が政治的・経済的だけでなく、こういった文化遺産保存の中でも切り捨てられる現状があることを主張している。

第 5 章「インカに虐げられ、インカを愛する人々」では、調査地域をエクアドルに移し、遺跡管理についての地域社会と政府の対立の状況があったことを明らかにしている。

第 6 章「集合的記憶の生成」では、第 1 章から第 5 章までで取り上げられた事例を参考にし、著者がペルーのクントウル・ワシ遺跡の発掘プロジェクトに携わった際、地域の村に博物館を立て、そこでの展示・経営について助言を行うなどの貢献を行ったことが取り上げられている。特に著者は本章の中で「住民が語る、遺跡と彼らの関係、発掘調査者との共有経験などの記憶、主観的歴史観をくみ取り、彼ら／彼女らの自主性を重んじること」「そしてなにより、それらすべての作業を地域住民と共同で行うこと」（本書 p.207）が実践活動において重要であると述べている。これはそれまでの調査によって得た情報から導き出した、考古学と地域の関わりについての一つの解答である。

本書は前述した通り、パブリック・アーケオロジーという試みに対して、アンデス地域を対象地域として、考古学と地域の関わりをフィールドワークによる調査によって明らかにし、そこから「考古学が地域にどのように貢献できるか」という問題に対する一つの解答を示した作品である。特に、第 3 章で取り上げた盗掘と地域文化の関係性や、第 6 章で述べているような「地域住民の認識・価値観や自主性を重んじること」の重要性について重視しているという点で、異文化に対する理解という問題でも一つの解答を示している。これは考古学という領域に捕らわれず、異文化を研究対象とする学問においても心得ておくべきことであると考えられる。同時に、文化遺産の保存と活用という場において、地域住民の自主性を重んじることが必要であると同時に、考古学者には遺跡を熟知し、地域社会に身を置いて調査を行う義務と責任があると述べてもおり、「研究者の立ち位置はどこにあるべきか」という疑問に対して、容易ではないとしつつも「こうあるべき」という実践者からの意見提示を行った作品であると考えられる。

著者は国立民族学博物館に籍を置きつつ、アンデスの考古学において発掘プロジェクトに携わっている。同時に考古学者の発掘地でのパブリック・アーケオロジーの取り組みについて様々な論文を発表しており、特に「考古学と地域の関わり」という点を重視している研究者の一人である。その中でパブリック・アーケオロジーという試みに対しても意見を述べているが、彼はパブリック＝公共ということばの示す意味について、より地域との繋がりを重視する意味で「公共という言葉が指す範囲が広すぎる」として、彼

自身の論文内では「コミュニティ・ベースド・アーケオロジ（community based archaeology）」ということばを用いている。この点から、著者にとってのパブリック・アーケオロジとは、遺跡および文化遺産に直接的な繋がりのある地域と人々と共に行うものであると考えていることが読み取れると私は考えている。

以上に述べたような筆者の視点は、パブリック・アーケオロジという試みに限らず、考古学全般において今後より重要視されることになるであろうと見受けられる。海外での地域研究において研究対象地域への貢献が訴えられて

いる今日において、本当に考古学者が貢献すべき対象とは何であるのか、それを考える必要性がある。その上で、筆者の主張をふまえて今後さらなる議論が交わされ、さらなる考古学の発展・社会への寄与に繋がることを期待する。

松田陽. 2012. 『入門パブリック・アーケオロジ』東京：同成社.

関雄二・染田秀藤. 2008. 『他者の帝国：インカはいかにして「帝国」となったか』京都：世界思想社.

西欧中心主義からの脱却と国家の外の歴史

上智大学アメリカ・カナダ研究所・イベロアメリカ研究所・ヨーロッパ研究所編. 2018.
『グローバル・ヒストリーズ：「ナショナル」を超えて』東京：上智大学出版.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
沖 春奈

本書は「グローバル・ヒストリー」の特徴を生かしてこれまでの研究事例を再検討・再解釈することを目的とした論文集である。著者は主に上智大学の教授であるが帝京大学、法政大学首都大学の教授も参加しており、専門も移民史研究、スペイン史、フランス史、女性史、経済史など異なっている。

第1部「国民国家のフィクショナルリティ」は第1章から第4章で構成され、グローバル・ヒストリーとは対極にある国民国家成立の歴史を再検討する内容となっている。第1章「国民国家の概念と実相」では、国民国家（ネーション・ステイト）という「概念」が持つ側面について整理し、その「実相」の例としてスペイン史を取り上げている。カタルーニャのように国民国家とそれに反発する地域との対立は現在まで続いており、国民国家の形成が一筋縄にはいかないことを明らかにする。第2章「フランス共和国の創造とネーションの境界」では、国民統合の過程についてフランス共和国を例に挙げ、フランス海外県のマルティニク（カリブ海）出身の詩人・政治家、エメ・セゼールの事例とともに考察する。同化教育を受けたセゼールは、しかしフランスでの経験から「マルティニク人」としてのアイデンティティを獲得していく。第3章「ドイツのベトナム移民」では、ベトナム戦争が終結した1975年以降南ベトナムからは西ドイツに、北ベトナムからは東ドイツにそれぞれ渡っていった人々に注目する。1989年のベルリンの壁崩壊で地理的な境界はなくなったが、結果として西ベトナム人と東ベトナム人という新たな境界が造られてしまう。第4章「エジプト・西部砂漠（リビア砂漠）の村からグローバル・イシュー「水」を考える」では、20世紀から展開された灌漑事業によってリビア砂漠の地下水位が低下し、同じ常水層の他の土地に

も影響を与えかねないグローバル・イシューに発展したことについて述べる。生活に欠かせない水を主題にすることで「国境のフィクショナルリティ」を明確にする。

第2部「脱西欧のグローバル・ヒストリー」は第5章から第8章で構成され、食、ファッション、思想などの国境を越えた移動と複数の地域との関連性について論じている。また視点をアジアにすることでヨーロッパ中心主義からの脱却を図っている。第5章「なぜワインはヨーロッパなのか？」では、西アジアを原産とするワインが様々な要因によりヨーロッパ的な飲料へと変わっていったことを述べる。そしてヨーロッパ中心主義的なワイン史のグローバル化による展開について考察している。第6章「アフリカンプリント」物語」では、西アフリカを中心に女性用のドレス生地として使用されているアフリカンプリントのルーツから、グローバルな生産者とローカルな消費者の相互作用がその確立と展開に大きな影響を与えたことを述べる。第7章「交錯する二つのグローバル・ヒストリー」では、ハワイ産コナ・コーヒーを主題として19世紀末からの日系移民の生産者とハワイ先住民の二者について論じる。グローバル・ヒストリーの課題として、移動しない人々が周辺化されてしまうことを指摘している。第8章「東アジアのアメリカ女性宣教師とグローバル・ヒストリー」では、東アジアで行われた海外伝道、19世紀後期から20世紀初頭のアメリカからきた女性宣教師の活動について語られる。そこでアメリカから一方的に知識・技術が流入してきたわけではなく、日中、日韓、中韓といった東アジア世界でも「知の循環」がみられることが論じられる。

第3部「マクロな視座からのグローバル・ヒストリー」は第9章から第11章で構成され、ジェンダー、人種、環境

などのマクロな視点からグローバル・ヒストリーについて論じている。第9章「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー」では、国家の近代化を進めるにあたって女子教育が重要視されたこと、その中でジャンヌ・ダルクのような西欧の女傑伝が、非西欧諸国でも大きな役割を果たしたことを述べている。第10章「黒人たちが織りなすもう一つのアトランティック・ヒストリー」では、黒人の主体的な移動に注目する。そのような越境経験は、1950年代に入ると白人中心的社会や世界への批判、アフリカに自らのルーツを求める運動へと発展していく。第11章「環境史から問い直す北米での「遭遇」」では、西欧人とアメリカ大陸の遭遇による関係の構築・崩壊には病原菌、食物、武器といった非人間的要素が大きく関わっていたことを論じる。

本書は冒頭で、グローバル・ヒストリー研究者の水島司の二つの著作を参考としてグローバル・ヒストリーの特徴に以下の五つを挙げている。

- ①国家の枠組みを超え、より空間的な広がりを持つ地域への着目
- ②対象とする時間軸を伸ばし、長期的な変化を踏まえた検討
- ③地域間の移動・循環・連携・相互作用等への着眼
- ④「人」を歴史の構成要素の一つとして捉え、環境、疾病、動植物など非人間の主題化
- ⑤ヨーロッパ中心主義的な歴史観の再検討と非ヨーロッパ地域への視点のシフト

それぞれの論文はこの特徴のうちのいずれかをテーマに取り入れており、グローバル・ヒストリーが非常に多様なものであることが分かる。また全体的には、とりわけ特徴の⑤にあたるヨーロッパ中心主義的な歴史観を見直し、非ヨーロッパ地域に焦点を当てることを重視している。なぜ歴史の中心がヨーロッパ、特に西欧となり、非西欧諸国の歴史がその辺境のように扱われていたのか、その原因は第1部のテーマである国民国家の成立にある。いち早く国民国家を形成した西欧諸国は確固たる自国の歴史を創りあげ、国民国家が成立していない地域を自分たちの歴史の外に位置づけた。外に追いやられた地域は後進国とみなされ、あたかも知識や技術、思想などが西欧からアジアやアフリカに

一方的にもたらされたものであるような印象を与える歴史観が形成されていった。つまりナショナリズムの成立こそが、歴史をヨーロッパと非ヨーロッパに分断したと考えられる。本書は国民国家を完全に否定しようという試みではなく、その枠組みの中で歴史を語ることに疑問を呈し、グローバル・ヒストリーという新たな視座で歴史を語ることの重要性を示したものである。ナショナリズムによって分断されてしまった各国史を、その枠組みを越えたグローバルな視点で見ることで、ヨーロッパ中心主義から離れた「世界史」に統合することができる。また国民の歴史として語られていた国民国家史の中で、国民ではなかった人々の歴史に光を当てることができ、歴史研究のさらなる段階に進むことが可能となる。

グローバル・ヒストリーだけでなく、どの分野でもグローバル化は近年注目され推進されている。反対にナショナリズムは虚構の存在として否定的に見られ始めているが、それでもなお深く現代に根付いている。多様化する世界においてグローバル・ヒストリーは広まるべき新たな研究である。しかし、それによって個々の「ネーション」を蔑ろにしては新たな問題を生むだけだろう。枠組みがなくなること、むしろ独自性が強調される可能性も考えなければならない。グローバルな視点をもつ場合、こうした問題点とも向き合う姿勢が必要であろう。

本書では各章の扉にそれぞれの内容に沿った地図が掲載されている。その地図を見ることでこれから読む論文がどの地域を扱ったものなのか、何について語ったものなのかを理解する助けになり、また多種多様な地図によってこの世界が教科書的な世界地図のように一元的ではないことを示している。各論文は執筆者が異なるため文体に差はあるものの、内容はその主題について初学者でも理解できるようになっている。また、章の終わりにディスカッション・クエスチョンとして本文に即した疑問点を読者に投げかけ、本を読み終わった後も読者に関心を持たせる工夫がされている。これらのことから本書は、内容紹介にもあるとおり、グローバル・ヒストリーの入門書として非常に有用であるといえる。

欧州ポピュリズムの生成メカニズム

庄司克宏・2018.

『欧州ポピュリズム：EU分断は避けられるか』東京：筑摩書房．

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
請川 真弓

世界がポピュリズムに揺れている。とりわけ欧州におけるポピュリズムは、EUに対する懐疑的な態度が顕著になっ

ており、2017年には各国のポピュリスト政党がめざましい躍進を遂げた。中東欧では政権を担う政党すら現れ、いま

や欧州の政治状況は左右対立ではなく、「親 EU の既成政党」対「反 EU のポピュリスト政党」という対立軸で語られる必要がある。このような状況を背景に、「なぜポピュリズムは EU を敵視するのか」、「EU という仕組みに内在する原因はないのか」といった観点から、欧州ポピュリズムの台頭と浸透を構造的に解明しようという試みが、本稿で紹介する『欧州ポピュリズム：EU 分断は避けられるか』である。著者は、EU の法制度と政策を専門とし、慶應義塾大学大学院法務研究所教授兼ジャン・モネ EU 研究センター所長を務める庄司克宏氏である。主著としては『欧州の危機：Brexit ショック』（2016 年、東洋経済新報社）、『はじめての EU 法』（2015 年、有斐閣）、『欧州連合：統治の論理とゆくえ』（2007 年、岩波書店）などが挙げられる。

本書は全 5 章で構成されている。第 1 章では、そもそもポピュリズムとはどういうもので、欧州におけるポピュリズムにはどのような特徴があるのかについて述べられている。ポピュリズムとは、「社会は「無垢の民衆」対「腐敗したエリート」という、同質的で相対立する二つの陣営に究極的には区別されるとみなし、[中略] 政治は民衆の一般意思の表明であるべきだと主張する、実質にかけた (thin-centered) イデオロギー」(p.29) であり、「大衆迎合主義」とも称される。本書ではポピュリスト政党を、移民排斥を主張する「排斥主義・ポピュリズム」と司法権の独立を否定する「反リベラル・ポピュリズム」とに大別し、前者は EU からの離脱を志向する「ハードな欧州懐疑主義」の傾向が、後者は EU の行動を抑制しつつ経済的利益を確保しようとする「ソフトな欧州懐疑主義」の傾向が強いとしている。

第 2 章では、EU という存在がどのような性格を帯びているのか、なぜポピュリスト政党から攻撃を受けるのかについて EU の制度的な側面から説明されている。EU という秩序は主権国家を超越した存在であり、EU の法令は加盟国のすべての法令に優越する。この非常に先進的な欧州特有の秩序について、著者は「ガラパゴス化」[＝「ある存在が外部世界から隔離された状況で独自の発展を遂げ、その結果、世界の趨勢から乖離していく状況」(p.54)] という用語を EU に当てはめて「ガラパゴス EU」と呼び、「ガラパゴス」であるがゆえに脆弱であると主張する。すなわち、元来 EU とは、難民の大量流入のような域外からの脅威だけでなく、それを巡って域内のポピュリズム勢力から受ける攻撃に対しても、脆弱な傾向にあるということである。また、ユーロ危機や難民問題に直面し、EU を設立当初から支えてきた「アウトプット型正当性」[＝「所与の政治システムが市民の望む政策結果をどの程度実効的に達成しているか」(p.73)] が揺らいでいること、「インプット型正当性」[＝「所与の政治システムが市民の民意にどの程度応えているか」(p.73)] から判断しても民意を十分に反映するような立法プロセスが採られていないこと、国家が EU 加盟後に EU の基本的価値（民主主義、法の支配、基本的人権）を犯した場合に EU が介入する権限と手段がほぼ設けられていないことなどが指摘されている。

第 3 章では、ポピュリズムの一般的な発生要因と欧州ポ

ピュリズムに特有の構造的要因とに目が向けられ、欧州ポピュリズムを生み出したのは EU の政治システムそのものであるということが明らかにされている。ここでキーワードとなるのが「モネ方式」である。これは、政治エリートが主導し、それを民衆が許容するというコンセンサスの下、最終目標を示さないまま漸進的に超国家的統合を進めようとする欧州統合のアプローチである。この方式で採択された EU の決定が増えれば増えるほど、EU という秩序の下位に位置づく加盟国の権限は減少し、国内の政党が競い合う「政策スペース」は限定される。つまり、EU の存在によって加盟国内の政治が「空洞化」され、主要政党の立場が収斂されてしまうため、ポピュリスト政党の付け入る政治的余地が生じる、というメカニズムが働いているのである。

第 4 章では、欧州各国でポピュリスト政党が台頭すると EU の決定にどのような影響が及ぼされるのかについて考察されている。著者は、「ハンガリーで政権与党を担う権威主義的な反リベラル・ポピュリスト政党が、ハンガリー国内において司法権の独立やメディアの多元性を損なうような「改革」を行っているにもかかわらず、EU はそれを法の支配に対するシステミックな脅威として対処せずに個別の EU 法違反として EU 司法裁判所に提訴するにとどまっている」という EU の微温的な態度について、欧州議会における党派政治の視角から説明している。欧州議会における二大政党グループの勢力が伯仲している状況（第 1 党：215 議席、第 2 党：189 議席）において、第 1 党に属するハンガリー与党（＝ポピュリスト政党）の議席数（11 議席）は貴重であるため、欧州議会においても、欧州議会第 1 党出身者が委員長と委員の多数を占める欧州委員会においても、ハンガリーのポピュリズムを擁護するような決定がなされているというのである。また、ポピュリスト政党が絡む国民投票に着目して、ポピュリストが政権に入り込まなくても、あるいは最も支持される政党にならなくとも、政治的な目標を達成できる場合があるということが強調されている。

第 5 章では、欧州委員会が「欧州将来白書 (White Paper in the Future of Europe)」で提示しているシナリオをもとに、前章で述べられたリスクに対して EU がどのように対応しようとしているのか、今後の欧州統合の方式にどのような構想があるのかについて検討されている。ここでは、いかにしてモネ方式を維持・発展させつつ EU のアウトプット型正当性を確保するかが中核的課題であるとし、「統合領域を限定化して EU による国内政治からの「隔離」空間を縮小すること」(p.198) がその処方箋になると考えられている。

本書の最大の特徴は、欧州におけるポピュリズムの発生要因を EU の本質的な構造に求めている点である。「欧州ポピュリズムの登場は EU 構築の副作用である」という説明は、多くの読者にとって斬新なものと感じられることだろう。そしてその説明を可能にしているのは、EU という存在を特別扱いしないという本書の「特殊性」に違いない。EU という存在は、1990 年代以降、その統治研究においてしばしば国家性と非国家性を兼ね備えた「特異な (sui generis)」政体としてみなされ、国家（連邦国家、国家連合）にも国際機

関にも分類できない格別な存在として扱われる傾向にある。しかしながら、本書では EU を特別扱いしたり例外視したりせず、むしろ、EU という仕組みがどのような意図をもって作られたのかということに着目して、「各国政治指導者により、代表制民主主義に伴う制約を回避して政策決定を行うことができる保護領域として構築されてきた政治システム」(p.96) とみなすべきであるとしている。つまり、国家としても、それが有権者に不人気なものであるならば、その政策を推し進めようとする政治家は選挙で敗北してしまい、そのような政策が実現することはなくなる、といった問題を回避するために作られた仕組みが EU なのである。このような EU という装置を活用することにより、加盟国の政治家たちは自国民の有権者に支持されていない政策を行うことができ、かつ、その責任を EU に転嫁することができる。民衆の側に立ってみれば、各国で民衆の不満と懷疑が蔓延していくのは必然であり、その受け皿として欧州ポピュリスト政党が登場するというわけである。こうしてみると、「各加盟国における代表制民主主義の機能不全に対する「解決策」」(p.112)として登場したはずの EU が欧州ポピュリズムをもたらした、というパラドックスが存在していることがわかる。

EU を先験的に例外視しないという本書の「特殊性」は、次の点にもみられる。すなわち、EU という超国家的秩序と主権国家とを並列して、EU にみられる特徴や役割が主権国家でいうところの何に匹敵するのか、あるいは、主権国家において存在するものが EU にもあってしかるべきではないか、と考える視点を堅持しているということである。たとえば、以下のような記述がある。

EU は国家ではないため、EU が独自の存在であることを表現するために「自律性」という言葉が使われ

ているが、これが EU にとって「主権」のような意味〔中略〕を帯びている。(p.57)

EU において最大の問題は、EU という政体内に「野党」を組織する権利が欧州市民に与えられていないことである。つまり、欧州レベルに与党（政府）・野党関係が存在しないのである。(p.113)

特に 2 つ目の指摘は EU の構造の究極的な欠陥を端的に言い表しているといえるだろう。伝統的な「与党」対「野党」という弁証法的な関係が存在しないということは、EU 統治の責任の所在を明らかにするのに適切な舞台が欠如しているということであり、民衆は、欧州に対する野党を組織するように追い込まれる。それゆえ、EU そのものを否定する反 EU 政党や、統合自体に消極的な欧州懐疑派政党が欧州ポピュリズムとして登場することになるのである。このメカニズムは、EU という存在を特別扱いせず、主権国家における秩序の常識的概念を EU にそのまま当てはめたからこそ解明できたものであるといってもよいのではないだろうか。

欧州ポピュリズムは EU の内部から生じる「内なる敵」であり、いわば「腫瘍が悪性化してがん細胞になるようなもの」(p.204) である。それは欧州の至る所に転移し、もはや「外科的手術」によって取り除くことは不可能となっている。EU は、内部から衰弱していくのを「内科的治療」で抑え、欧州ポピュリズムというがん細胞を縮小させるために長期的に戦っていくしかない、と著者はいう。本書は、そのがん細胞が EU 内で生成・増殖されるメカニズムを構造的に解明したという点で、欧州ポピュリズム研究に大きく貢献したといえるだろう。EU は、欧州統合のパラドックスを抱え込みながら、蔓延したポピュリズム勢力を抑えて生き延びることができるのか。今後の EU と欧州ポピュリズムの関係に注目する必要がある。

飛び越える想像力の可能性

スピヴァク、ガヤトリ・C. 2011. 鈴木英明訳
『ナショナリズムと想像力』東京：青土社。

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程
増井 利晃

ナショナリズムは、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(白石隆・白石さや訳、1987 年、リブレポート) や、日本では西川長夫『国民国家論の射程』(1998 年、柏書房) などで論じられてきた。現存する国家を一単位として、自国の文化・言語・歴史を絶対視することの危険性は、誰しもが認めうることであるだろう。しかし、一方でそうした創られたナショナリズムは、衰退をみせるどころか、今な

お世界中で人々の心をとらえてはなすことがない。私たちはいかなる時にナショナリズムから自由になるのか、ナショナリストでなくなるのか。そうした問題関心から、出版からしばらくたった本書の書評を本誌で取り組むことにしたい。

本書は、インド出身の比較文学研究者であるガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクが、ブルガリアのソフィ

ア大学で行った講演内容を収録している。スピヴァクは、1942年にベンガル州のカルカッタに生まれ、カルカッタ大学卒業後は、アメリカに留学し、現在はコロンビア大学で教鞭をとっている。スピヴァクは、ポストコロニアリズムの代表的人物として、またフェミニズム思想家としても知られ、『サバルタンは語ることができるか』（上村忠男訳、1998年、みすず書房）は、日本でも大きな関心をもって読まれた。

本書は、スピヴァク自身による講演「ナショナリズムと想像力」、およびその講演に対する質疑応答から成り立っている。スピヴァクによるナショナリズム論が短くまとまったものであるといえよう。

講演「ナショナリズムと想像力」では、はじめにスピヴァク自身の子供時代のインド生活が語られる。スピヴァクが子供の頃のインドは、イギリスからの独立を迎える転換期であり、第二次世界大戦後の飢饉と、独立に際しての宗教的対立があった。そしてインド独立後の1950年代にはスピヴァク自身が祖国のナショナリズムの高まりを自覚したことが回想されている。こうした自身の体験と重ね合わせながら、スピヴァクは「正統性の起源としての、再生産〔生殖〕をめぐる異性愛規範にナショナリズムが関連している」（p.15）と述べ、ナショナリズムにおけるジェンダー論的な視点を提供している。ここでは、ネーションを愛するということが、母語を愛することや生まれた地域を愛することと同一視されるのはなぜかという問いが立てられるのであるが、こうした問いかけをおこなうとともに、そうした同一視によって、人々が「安らぎ」を抱くことを読み取っている。こうした「安らぎ」はいかにして生み出されるものか。

「安らぎ」の創出は、公的領域に属するナショナリズムがもつ、私的領域を再コード化するという能力によるものだ。すなわち、ナショナリズムは国民生活に浸透することで、その再コード化された私的領域のもとで「安らぎ」を生み出すのだ。そうした魔術的ともいえるナショナリズムは想像力の産物に過ぎないのであるが、スピヴァク自身はそうした想像力に対抗する想像力、すなわちナショナリズムを解除する想像力について論じている。

スピヴァクは、ナショナリズムを解除する想像力を論じるにあたって、物語の等価性について言及している。サバルタンの女性たちの口承定型詩が単調でありながらも、一方で生み出された詩が等価性によって創意工夫に満ちあふれているとされる。ここでいう等価性とは、「自分の第一言語が占めている唯一無二の場所を他のものが占めることができる」（p.33）という意味である。言い換えれば、言語の等価性とは、一つの言語がその言語の閉塞性を越え出ることを意味していると理解できる。これによって、異なる言語間の比較文学も成立し、サバルタンの詩もまた外国語に翻訳されることで、他者によって理解することが可能になる。人間が習得する言語は、第一言語である母語の他にも学ぶことによって得られる言語があり、その後天的に習得された言語が、ナショナリズムによって囲い込まれた母語の文学から、比較の方法によって、ナショナリズムに対抗する

契機を生み出す。あらゆる文化的アイデンティティ＝ナショナリズムに対抗して、それが隠す異性愛中心主義的な社会規範を退け、ステイトとしての国家の構造を維持すること、比較文学的な想像力によって一国にとどまらない地域主義的な見方に立つことが重要であると述べている。

「質疑応答」では、スピヴァクが提唱するナショナリズムから切り離された国家、市民国家からなるユートピア的世界の可能性についての質問が提起され、それに対し、スピヴァクは、国家間の境界を再コード化することによって、ネーションとしての国家を脱・超越化することが求められると応答している。

スピヴァクの議論で特筆すべき点は、①ナショナリズムが異性愛中心主義と親和的であるとする点、②ナショナリズムを解除する方法としての想像力を論じている点、③ネーションならぬステイトとしての国家に可能性を見いだしている点である。以上3点について、ここで簡単に述べておきたい。

①に関しては、スピヴァクによれば、ナショナリズムにおいて異性愛中心主義が親和的なのは、女性がネーションの未来（すなわち子供）を孕む存在としてみられ、婚姻および出産という異性愛のあり方がふさわしいとされるためである。民族という幻想に国家の根拠を見いだすネーションにおいて、民族の繁栄は死活問題であり、そうした観点から、私的領域への異性愛中心主義的介入が行われるのだ。こうした視点に立てば、性的マイノリティーをめぐる諸問題を、個人的なレベルにおしとどめることなく、国家的な問題として位置づけることができる。性は決して私的なものでなく、公的に絶えず干渉を受け続けているものとして捉え返すことで、性を矮小化することなく議論の俎上にのせることができるのではないだろうか。

②に関しては、本書においても言及があるが、スピヴァクのいう「想像力」はベネディクト・アンダーソンの「想像力」とは逆方向のベクトルを向いているということである。アンダーソンは、『想像の共同体』の中で、ナショナリズムの想像力がネーションという共同体を創り出したことを述べているが、一方でアンダーソンは、そうした想像力が不可欠であるとも述べている。彼が対象とするインドネシアが多民族国家であり、そこでは「共通のプロジェクト」としてのナショナリズムがインドネシアをネーションたらしめているとされる。その一方で、スピヴァクはジェンダー的抑圧を含む文化的アイデンティティ＝ナショナリズムに対し、その特異性とされる言語を、等価性の下に揺るがそうと構想している。そこでの想像力は、比較文学の方法によってはたらくとされるが、スピヴァクは別の箇所でもこのようにも述べている。「諸言語は、言語である以上等価である。そして深い言語習得は、言語的記憶の模像に向かって内破していくものである……それがあってこそ私たちは、言語的伝統を比較するという立場を超越し、特権的影響力を行行使する比較者の立場とは違う地点から、言語との関係を作ることができるのです」（スピヴァク 2009: p.64）。比較文学は、対立する二項を対立したままにしておくのでは

なく、それぞれの文学がもつ伝統を内破する。この点にスピヴァクがナショナリズムを越える想像力の可能性を見いだしていることを理解することができるだろう。

③に関しては、国民国家は、ネイション＝ステイトの訳語であるが、スピヴァクはネイションの批判をする一方で、ステイトとしての国家の「再発明」も提唱している。それは今日のグローバル化する社会のなかで、新自由主義の下での再分配機能が維持されていないという問題意識によるもので、ステイトとしての国家にこうした役割を担わせようという提案である。ナショナリズム批判は、日本においては国民国家論批判として受容された側面があるが、こうしたステイトとしての国家の機能を、スピヴァクはむしろ維持すべきとしている点が非常に重要である。

スピヴァクの仕事は、先にも述べたように『サバルタンは語ることができるか』が著名であり、そこで展開された

ポストコロニアリズム思想がよく知られているが、一方で本書におけるナショナリズム論は現代におけるナショナリズムの高まりと排外主義、異性愛中心主義の関係性を考えるうえで意義深い。またナショナリズムの「内破」の契機を、言語的等価性に求めるというスピヴァクの視座は、文学・言語を扱う人文科学の立場が受け止める必要のあるものであろう。

アンダーソン, ベネディクト. 2016. 山本信人・新倉貴仁訳「インドネシアのナショナリズム：その現在と未来」『思想』2016.8号, pp.24-41.

スピヴァク, ガヤトリ・C. 2009. 新田啓子訳「比較文学再考」ガヤトリ・C・スピヴァク, 鶴飼哲監修『スピヴァク、日本で語る』東京: みすず書房, pp.59-76.